

---

# 夢解

烏

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

夢解

### 【Nコード】

N2026B

### 【作者名】

烏

### 【あらすじ】

他人の夢に入り込み、夢に苦しむ人々を救う組織『夢解』その組織の一人である、氷壁淑とパートナーのミウミ。日本にある彼等の事務所には、毎日、夢に苦しめられている人々の相談が引っ切り無しに訪れる・・・

## プロローグ

初めまして諸君。私がこれから話すことは、夢についてだ。

目を閉じて眠りにつくと、大抵の人は夢を見る。夢とは、現実のようで現実ではない、不思議な世界だとは思わないかい？死んだ人に会えたり、想いを寄せている人が現れたり、不可能を可能にする世界だと、私は考える。しかしその逆で、信じられないほど残酷な夢や、恐ろしい夢もある。どうにかして目覚めたくて、起きたら汗だくになっていることもあるだろう？

人は時として夢に殺されることもあると思うんだ。うなされ、苦しみながら息絶える・・・そんなこともあるんじゃないかとね。

さて、今日のメインの話しをしよう。諸君は、この夢を利用して殺人ができると聞いたら、信じるかい？

そうだろう、笑ってしまうのが当然だ。私も最初はそうだった。だってそうだろう？そんなことが可能なら、完全犯罪なんてお手の物さ。死人に口なし、証拠は何一つないんだからね。

しかし、これが笑い事では済まされなくなっただ。信じがたいが、近年起きた未解決事件の半分が、この夢による死ではないかと唱える連中が現れた。連中は最初、笑い者だったよ。誰も信じなかった。でもね、今じゃ連中を笑う者は誰一人いないよ。

だって、彼等が次々と死にそうになっただ人々を救い出していったんだからね。

## 夢解

彼等の組織名は「夢解」と言う。夢から人を解放する力を持ち、世界中に散らばっている。諸君等も、今は信じられないかもしれないが、もしこの中で夢にうなされている人がいるなら、私のところに来なさい。

夢解

彼等を、紹介してあげますよ。

## 和美の夢

暗い、暗い。またここに、来てしまった。右も左も、上も下も、あるのは暗闇だけだ。声を出しても、返ってくるのはこだました自分の声。

そんな中をしばらく歩き続けると、急に視界が開ける。目に映る場所は、池だ。その池は、どこかで見たことがあるが、思い出せない。辺りは少し霧がかかっていて、吐く息は寒くもないのに白い。試しにあたしは、池に手を入れてみるが、何も感じない。なぜ、ここに池があるのだろうか・・・どうして？

「カズミちゃん・・・」

突然、背後からあたしの名を呼ぶ声。

振り返っても、誰もいない。

「カズミちゃん・・・」

まただ。

あたしは辺りを見回して、声の主を捜す。

「誰？」

「カズミちゃん・・・」

声は段々近づいてくる。あたしは、正体の分からない声に体が震えた。

「誰なの?!」

叫んでも、叫んでも「カズミちゃん」しか返ってこない。

イヤだ、怖い。誰？あたしは頭を抱えて、しゃがみこむ。池に映ったのは、真っ青になった自分の顔だ。

「ねえ・・・カズミちゃん」

池の水面が揺れると、映っていた自分の顔がゆっくりと変わる。

「カズミちゃん・・・」

現れた顔を、あたしは知らない。見たこともないし、記憶には残っていない。

「ねえ、カズミちゃん!!」

水面からその子は姿を現し、あたしの腕を掴んだ。引きずりこまれる!! あたしは、悲鳴を上げた。

目覚めた場所は、自分の部屋のベッドの上。大量の汗が、シーツの色を変えていた。呼吸が上手くできず、体はまだ震えている。

鏡に、真っ青な顔と目の下にできた酷い隈が映る。あれが・・・あたし? あんなにやつれたの?

「和美しい! 遅刻するわよ!」

母親の声が、頭の中に響く。朝が来たんだ、学校に行かなくちゃ。でも、頭が働かない。そういえば、ここ何日まともに眠ったことがない。

でも、学校に行かなくちゃ・・・。

ふらつきながらもベッドから降りると、視界がぐるっと回転した。目の前は真っ暗になり、それ以降の記憶は止まってしまった。

## 夢職 氷壁淑

N区にある『夢解 事務所』

商店街に入り、スーパーに負けそうな八百屋と、今にも崩れそうな時計屋の間に挟まれた鉄筋コンクリートのビルの二階に、それはある。

錆付いた螺旋階段を上がると、これまた錆付いたドアが現れる。表札も何もないため、素通りしてしまう可能性もあるのだが、面倒くさがりのここの主人は未だに何もしていない。

「先生！このままじゃ、ファックス壊れますよー!!」

止めどなくファックスから溢れ出てくる紙、紙、紙。まるで、悪いものでも食べて吐き出しているようだ。

「うわぁ！本部からの連絡事項もあるじゃないですか！」

大量の紙の山の中には、期限が過ぎた重要書類もあるようだ。

紙の山を掻き分け出てきた三つ編みの女の子は、この事務所の雑用係であるミウミ。いつも黒のワンピースを着て、この事務所の主人と戦っている。

「先生？せんせえ！どこおー!!」

ワンルームの部屋に、ミウミの声が響く。

「ダアアア！」紙の山から出てきたのは、赤いショートヘアの猫目の男だ。

「先生！生きてましたか！」

ミウミは目を丸くする。

「ミウミィ・・腹が減ったよお・・」

目に涙を浮かべて出てきた男は、この事務所の主人、氷壁淑だ。

いつも右側だけが跳ねている髪型が特徴的。

「もお先生！いい加減、このファックスから溢れ出る書類、ちゃん

と取ってくださいよ！」

「腹が減ったんだあ」聞いちゃいない。

「・・・ご飯の前に、大掃除です！！！！」

ミウミの怒鳴り声は、外まで響き渡っていた。

「野辺の野郎、またメンドイ依頼を送りつけてきやがった」

ざっと百枚はある紙は、全てこの事務所にきた依頼だ。

「けど、野辺教授がうちのことを宣伝してくれるお陰で、依頼が来るんじゃないですか！有り難いですよ」

ミウミの掃除のお陰で姿を現したガラスのテーブルに、温かいココアが置かれる。

「迷惑極まりない、クソ教授め！人の事務所をペラペラと喋りやがって」

淑は、依頼書を放り投げた。

「うちは、野辺教授の依頼のお陰で成り立ってるんですよ！そんなこと言ったら、罰が当たります」

淑の返事はなかった。

夢解とは、夢に苦しむ一般人を救おうと、アメリカで結成された組織である。今のところ、アメリカ本部と、中国支部、日本支部、イギリス支部が存在する。

夢から一般人を救えるのは、他人の夢に入る力を持った「夢職」と呼ばれる人たちだけ。この「夢職」になるには、長い修行を必要とする。そのせいか、ごくわずかしが存在しないのだ。特にこの日本に存在する夢解の事務所は、淑のところを含め三つしかない。

依頼は、毎日数十件くる有様だ。

「この依頼なんて、至急つて書いてあるじゃないですか！」

くしゃくしゃになった依頼書を伸ばし、ミウミは淑を見つめた。

十三歳という若さで夢職の地位に着いた淑を、ミウミも尊敬はしているが、彼のこの面倒くさがりの性格だけは受け入れられない。

不満を抱きながらも、二人が組んでから三年が経つ。

「それに先生、いい加減、依頼受けないと今月の家賃払えませんかよ！」

淑の顔色が真っ青になった。

「家賃なんかに負けてたまるかぁ！！！」淑は勢いよくソファアの上に立ち上がった。

「先生！もう三ヶ月分たまってます！確実に負けてます！！完敗ですよー！！」

こうしてしぶしぶ、淑は依頼を受けるのだった。。。

## お仕事開始

福島和美。高校一年。夢にうなされるようになったのは、高一になつたばかりの春から。

淑とミウミがE駅で下車すると、彼女の母親が迎えに来ていた。

「随分、苦しんでおられるんですか？」ミウミが心配そうな顔をして、母親を見つめる。

「ええ、きつと驚かれるわ・・酷い顔をしてるから」

彼女の母親は、不安そうな声で言った。

着いた家は、まだ真新しさが残る赤い屋根の家。

「どっかから、引越してこられたんですか？」淑が聞く。

「高校が決まった春に・・」

仕事に関して淑はいつも冷静沈着だ。大きな猫目で周囲を観察して、場面場面を記憶していく。

「どうぞ・・」

通された部屋のドアには、カズミROOMと書かれた可愛い札がかかっていた。

母親は、そのドアを慎重に叩く。

「和美、入るわよ」

ドアをゆっくりと開けると、ベッドの上に座っている女の子が目映った。

痩せこけて、青白くなった顔。目の下にできた隈は、彼女の苦しみを物語っている。その姿には、生きる気力というものが全く感じられなかった。

「体、大丈夫？夢解の方がいらしてくださいさっ たわ」

和美の虚ろな目が、二人を捕らえた。

「彼女と、話してもいいですか？」

「ええ、どうぞ」

淑は不安そうな母親をよそに、ずかずかと彼女の側に寄る。仕事

に関して、淑に遠慮は一切ないのだ。

「氷壁淑と申します。こっちは助手のミウミ」

「夢解って、なん、なんですか？」

和美は、片言を懸命に出す。

「あなたのように夢に苦しむ人を救おうと結成された組織です」

淑の言葉に、和美の目の色が変わった。

「助けて・・・くれるの？」

「はい。必ず」

キリツとした表情をする淑には、すがりたくなるような強さがある。

あたしは、闇の中にいるの。どこだか分からない場所に・・・とてつもない不安を感じているの・・・。走って、走って、やっと見えてきた景色はどこかの池。辺りは静まり返っていて、霧に包まれているわ。恐いの。最初はそうでもないんだけど、なぜか徐々に恐怖に襲われてくる。

そして、あたしの名前を呼ぶ声がする。その声は、段々近づいてきて、突然、水面にあたしじゃない人が映る。その人が、あたしを呼ぶの。その人をあたしは知らない。名前も、顔も見たことないわ・・・。でも、その人はあたしを池に引きずり込もうとするのよ。腕を掴まれた瞬間、恐怖で叫ぶの・・・。

そして、夢から覚めるわ。

この夢に、あたしはずっとうなされてる。あたしは、あたしは・・・  
きつと、夢に殺されるわ。

「和美ちゃんの話し、どう受け止めたんですか？」

「お前はどう受け止めた？」

「私は、絶対危険だって思いましたよ！このままだったら、和美ち

やんがあの世に行っちゃうのも時間の問題です！早急に手を打つべきです！」

ミウミが自信満々に答える。

「・・・無害だと思うがな・・・俺は」

「へ？」

淑の以外な返答に、思わず目が点になった。

「な、何言ってるんですか！あんなに苦しんでいるのに！」

「もし、誰かが意図的に彼女を死に至らしめようとしているのなら、もうとつくに殺しているさ。でも、一ヶ月経っても彼女は死んでいない。ここがポイントだ。苦しんではいるが、死んではいない」

「どういうこと？ミウミの表情はそう訴えていた。」

「多分、引きずり込もうとしてきたっていうのは、あの子が勝手に抱いた過剰な妄想だな・・・人は恐怖に陥ると、勝手な想像が働くんだよ」

「ミウミはまだ納得がいかないのか、腕を組んだまま難しい顔をして歩く。」

「まだ夜には時間があるからな・・・ちよつと行くぞ」

「え、どこへ？」

この展開が予想外だったミウミ、淑のテンポについていけないかった。

春だというのに、淑が嫌いな冷たい風が吹く。

二人が向かったのは、和美が住んでいた前の住所。

## 解放せよ

「酷い顔です、先生・・・」

ミウミは目を伏せながら、うなされる和美の手を握った。

「行くぞ」

和美の左手を握った淑は、深く深呼吸した。

「苦しみの夢から、依頼人カズミを解放せよ」

淑がそう呟いた瞬間、二人は和美の横で気を失ったように倒れた。

二人が和美の夢へと突入した。

「不気味ですね・・・」

霧に包まれる空間、ミウミは思わず両腕を抱く。

「いた」淑の目は、池の前にたたずむ和美が映った。

淑は、急にエンジンを入れたバイクのように飛び出す。ミウミも、

慌ててその後を追う。

「・・・しゅ・・・く・・・さん」

和美が、体を震わせながら走ってきた淑を見つめる。

見れば、和美の手を水面から現れた黒髪の女が握って離さない。

「た、助けて・・・淑・・・さん」

搾り出すような彼女の声を聞いても、淑はその場に立ったまま。

動こうとはしない。

「先生！何してるんですか！」

見兼ねたミウミも、声を荒げる。

「和美、本当にそいつのこと、知らないか？」

「し、知らないわよ！誰なの？！何であたしを苦しめるの？！」

パニック状態に陥っている。

「こいつは、あんたを苦しめたいわけじゃない。聞いてもらいたいんだよ」

淑の言葉が、少しだけ和美を冷静にする。恐れず、その目を女に向けた。

「聞いてやんな。ちゃんと聞けば、この夢からは解放される」

ミウミもいまいち状況が掴めないのか、首を傾げた。

「あ、あたしに、何か言いたいの？」

その声に、黒髪の女はニツコリと笑う。

「先生？」ミウミが淑を見る。

「黙って見てろ・・・」

黒髪の女が、その手を和美の額にあてた。

## 緒方奈々

緒方奈々。あだ名はゴミ。鈍臭くて、ダサくて暗い私は、どこへ行ってもイジメの的だった。成長するにつれてエスカレーターしていったイジメは、中学三年の時がピークだった。

「本当、見るとイジメたくなんだよねえ！」

「ゴミなんだからさ、生きてる価値ねえっつーの！」

日々浴びせられる罵声。心が張り裂けそうに痛くなるけど、こんなものには耐えられた。けど、体育倉庫に閉じ込められたり、泥水の中に顔を沈められたりするの、毎回恐怖でたまらなかった。いつくるんだろう、今日はどんな目に遭うのだろう、苦しみは私から生きる気力を奪っていった。

あだ名の通り、ゴミのように扱われ、存在を否定される。生きる意味を失った私に、残された道は死。

死ねば、楽になる。

毎日その考えしか浮かばなかった。

「上手だね・・・」

だから、そんな私にある日突然、声を掛けてくれたあなたが救世主のように思えたんだ。

今も鮮明に覚えている。体育をズル休みして、教室で好きな漫画を描いていた時だった。ショートカットの髪型がよく似合う、見るからに明るい女の子。

「その絵、上手だね」

あなたは、私の描いた絵を見てそう言った。

笑っていた。優しい笑顔で、私を見てくれた。

「は、恥ずかしいから見ないで・・・」

物凄く小さい私の声にも、あなたは丁寧な言葉を返してくれた。

「あたし、絵の才能ないから詳しいことは分からないけど、なんか・あつたかい絵だね」

あつたかい？

「この子の笑顔とか、見てるとあつたかくなるよ」

あなたが指した女の子は、私が描いている中でも一番お気に入り  
の女の子だ。

「あ、ありがとう・・・」顔が真っ赤になった。初めて言われる言葉  
の数々に、あたしは恥ずかしくて嬉しかった。

そう、嬉しかったんだ・・・。声にならないくらい、涙が溢れるく  
らい、嬉しかった。

あつたかい絵。そう私に言ってくれたのは、隣のクラスの福島和  
美。

私は、この名を一生忘れまいと思った。

私は、あまりのイジメで学校を休んでいる間も、漫画だけは描き  
続けた。希望なんてなかった私の人生に、唯一光をくれたあなたの  
為に。あなたに見てもらいたくて。

そして、初めて完成した作品を抱えて、私はあなたに会いに行っ  
た。イジメていた連中の存在なんか忘れて、私は夢中で走った。

できたよ、読んで！そう元気に言っただろう。心に決めていた。  
それなのに・・・

「あれ？ゴミじゃん！」

残酷な運命は、どこまでも私を苦しめる。

イジメていた連中に捕まった私は、学校の側にある静まり返った  
池に連れていかれた。誰も来ない、その恐怖に足が震えた。

でも、どんなことされても耐えてみせる。コレをあなたに持って  
いけるのなら。

「大事そうに、何持ってんのよ!？」

連中が、私から封筒を取り上げる。

ダメッ！その封筒は!!!

そう思っても、声が上手く出ない。

「ヘツタクソな漫画あ・・・あんた描いたの？」

「さ、さわらない・・・で・・・」震えながら、やっとの思いで声を出した。

「大事なんだ？」

ねちっこい笑が、私の目に映る。

連中の一人が、ソレを池の方に向けた。

「やめてえ！お願い！！！」

「じゃ、取りに来なさいよ」

あなたのことを描いたの。独りぼっちの主人公に、初めて友達ができる。あなたが私に向けてくれた笑顔を描いたの。だから、絶対にあなたに一番に見てもらいたい。読んでもらいたい！

どんなことされても・・・

「返して！」

私は、夢中で走り出した。

「どうぞ・・・」

笑いながら、連中はその原稿を池にはらまいてしまった。私の原稿。大切なモノ・・・

だから、池に飛び込むことなんて恐くなかったよ。私には目的があったから。卒業する前に、絶対にあなたに見せてこう言うの「ありがとう」って。私に生きる力をくれて、ありがとうって・・・そう心に決めていた。

でも、ダメだった。あなたにコレを見せることは、できなくなっ  
てしまった。

「つつ！！！」和美が、我に返る。

「い、今のは・・・何？」

「こいつの記憶を、あなたに見せたんだよ」  
淑が淡々と答える。

「二度夢ってヤツ。夢の中で、夢を見たんだ」

和美は、目の前の女を凝視する。

「・・・緒方、奈々ちゃん」

和美がそう呼ぶと、女は笑った。

「そう、こいつは緒方奈々。あんたと一緒の中学。こいつは、ずっと夢の中であんたを探していたんだよ。言いたいことがあったから」  
ミウミは、目に涙を浮かべる和美を見て、自分もつられて涙を流した。

「こいつが見ている夢と、あなたの夢が交差したんだ。その交差した場所が、この池だ。何か思い出したか？」

和美は、思い出した。中学生の時、この池で誰かが溺れた。それが同級生立ったとは知っていたが、誰かまでは知らなかった。

「ごめんなさい・・・あたし、あなたに酷いこと言って」

和美は、もう震えていない。

「さ、そろそろ夜が明ける。夢から覚めるんだ」

淑はそう言って、手の中から光の玉を生み出す。

「待つて！もう、会えないの？」和美が声を上げる。

「会えるさ。あんたが中学時代住んでいたところにある、病院に行けばな」

「どういうこと？」

「こいつは、事故のショックからまだ目覚めていない。緒方奈々は、まだこの夢の中にいるんだ。病院に入院してる」

和美が涙を流した。

「待つてて・・・必ず会いに行くから」

それを聞いて、淑は生み出した光の玉を掲げた。

「依頼人カズミを、この夢から解放する！」

言葉と共に、光が周りを包み込んだ。

「夢解！」

淑の言葉で、辺りは真っ白になった・・・。

## お仕事完了

お元気ですか？あたしは、お二人に夢から解放されて以来、いつも通りに学校に行けるようになりました。最初は、久しぶりで凄く緊張したんですけど、クラスの友達も心配してくれていたようで、会ったらみんなで泣きました（笑）

それとあたし、緒方さんに会いに行きました。彼女は精神病棟にいて、全く喋れない状態と聞き、最初は何を伝えればいいのかわからなかったんです。でも、夢の話をしました。返事はなくても、夢であたしたち会ったんだよって伝えました。そしたら、少しだけ彼女が笑ったように見えたんです。気のせいだったかもしれませんが、あたしにはそう見えました。

帰り際、緒方さんのお母さんから漫画の原稿を一枚貰いました。それは、あの時あたしに渡そうと思っていた原稿の中の一枚だそうです。

『太陽のように眩しい笑顔に救われた ありがとう 』

そう言葉が書いてあり、笑顔の少女が描かれていました。嬉しかったです。あたしも、彼女にへたなりに絵を描いて渡したんです。

『友達だよ』って言葉を添えて。

また、会いに行こうと思います。

本当にありがとうございました。また、ファックス送ります。では

福島和美

## 夢解

「もお先生！自分が興味あるファックス原稿だけ取らないで、ちや

んと全部目通してくださいよ!」

ミウミの金切り声に、耳を塞ぐ淑。

「けど、良かったですね。和美ちゃん、元気になって」

「はああ!クソ教授のせいで、疲れちゃったよ」

生意気、わたまま、面倒くさがり、最悪の三種の神器が揃っている奴だけど、ついていきたく何かを持っている淑。ミウミが、給料なんかもらえなくてもここにいるのは、その何かのせいなのかもしれない。

さてさて、彼等の次なる仕事は・・・??

END

## 花畑

花畑。

ここは、昔住んでいたところにある花畑だ。誰も来ないここを小さい頃、勝手に自分の隠れ家にした。親にも、兄弟にも秘密。僕だけの楽園にした。

ここに招待したのは、ただ一人。百合のように可憐な女性、紗江さえだ。

紗江はここに来るなり、涙を流した。こんなに美しいものを見たことがないと、僕に言ってくれた。その時、僕は決めたんだ。

この人と、結婚しようって。

小さなダイヤの指輪を渡し、ありったけの勇気を振り絞ってプロポーズした。顔から火を噴くとはこういうことなのかと、その時初めて理解した。でも紗江の透き通るような瞳が、僕を真っすぐ見にくれから、恐くなかった。

「私からも、いつまでも一緒にいてください・・・」

この言葉を聞いた時、世界の色が一变して、僕は飛び上がりそうになるくらい喜んだ。

幸せの絶頂とは、このことだ。

一緒だよ。死ぬまで一緒だよ。握りしめたこの手は、絶対に離さない。離さなければ、一生一緒にいられる。

僕は、そう信じていたんだ。

なのに・・・

結婚式の一週間前、紗江は突然逝ってしまった。本当に、呆気なく。僕が知らないところで、逝ってしまったんだ。

神様なんていないんだと思った。なぜ、紗江なんだ?!僕らが何をしたと言っただけ?!ささやかな幸福を望んだだけなのに、与えられた運命はこんなにも残酷。

もう会えない。昨日まで笑っていた彼女は、目を閉じて冷たくな

っている。

葬式が終わった後、呆然としていた僕は誰もいないところで声を上げて泣いた・・・。

依頼人 風見章吾

元気にしているかね、淑。ミウミをいじめてはいないだろうね？  
今回ファックスを送ったのは、依頼人から苦情が殺到しているこ  
とを伝えようと思ってね。私が紹介した夢解の人から、もう大分経  
つのに何の連絡もないってね・・キミのことだから大方、面倒くさ  
くて依頼を放り投げてるんだろ？

キミは腕がいいのに、動かないのがネックだ。働きたまえ淑！キ  
ミに、良い言葉をあげよう。  
働かざる者食うべからず。

以上

野辺

「つんな言葉いらねえよ！クソ教授！！！」

丸まったファックス原稿が、壁にぶち当たる。こうして、淑の事  
務所はどんどん汚れていくのだ。

「せめてゴミ箱に入れてくださいよ・・」

ミウミのため息は、今日も止まらない。

「大体、このことを勝手に紹介しやがって・・名誉棄損で訴えて  
やるよ！」

「広めてくれてるんですから、名誉なんて傷つけられてませんよ！」

ミウミの意見は最もだ。

「じゃあ、精神的ダメージを受けたとして訴えてやるよ」

ダメージを受けるような精神なんて持ってないくせに・・

「とにかく先生！さっさと働いてください！」

「まあ家賃がどうのって言うんだろ？」

その言葉と同時に、ミウミは溜まりに溜まった家賃の請求書を淑  
に叩き付けた。

「先生、何か文句ありますか？」  
「……すみません、働きます」

依頼人、かきみ しょうじ風見章吾二十八歳。

「大学医学部を卒業。付属病院の外科に勤めるものの、現在は休職中。頭脳明晰であり、性格は温和。周りからの評判は上々。

内容は、彼が起きる時間が毎日遅いということ。彼は朝起こされるということはまずなかったが、今では家の者が起こしに行っても起きず、丸一日寝ていることもあるようだ。

単なる寝すぎで片付けたいところだが、家族は彼の寝言に心配しているようだ。

## 夢で死ぬ

「大きな家え・・・」ミウミの開いた口が塞がらないのも無理はない。

立派な瓦屋根の依頼人宅は、大河ドラマにそのまま使えそうな家だ。

「依頼料、ふんだくってやろうかな・・・」

淑の呟きに、ミウミも否定はしなかった。

インターホンを鳴らすと、着物姿の女性が現れた。

「依頼を受けました、夢解の氷壁淑です」

「お待ちしております。どうぞお入りください」

丁寧な言葉に、なぜかミウミが少し緊張した。

「す、素敵なお屋敷ですね？」

「もう古くなっていきますんで、恥ずかしいですわ」

女性と話すミウミの不自然な笑みに、淑は思わず吹き出しそうになった。

屋敷の中は、時代を感じるほど古く、置いてある骨董品の数々には相当な値がつくのだろうと思った。この空間は、まるで時間が止まっているようだ。

客間に案内されると、高級さがあふれ出している和菓子を出された。淑は手を付けなかったが、ミウミはガキのように満面の笑みを見せながら食べている。

「依頼内容について、詳しく知りたいのですが」淑が話しを切り出した。

「はい、息子の章吾のことなんです。あの子、就職が決まってから何だかおかしくて・・・ここ最近じゃ、それが酷いんです。特に、朝起こすなんてことはしたことはないのに、今じゃ私が行っても全然だめなんです」

「疲れてるんじゃないんですか？」ミウミが、母親の様子を伺いな

がら尋ねる。

「始めは、医師として疲れているとは思っていたんですが、今は仕事も休職中ですし・・・何だか私には、起きることを拒んでいるように見えるんです。前だって、何で起こしたんだって私に怒鳴ってききましたから・・・」

そんな子じゃなかった・・・母親はそう言いたそうだった。

「今、いますか？」

「ええ」心配そうな目を、母親は淑に向けた。

「そうですか・・・それと、寝言が気になるようですが・・・」

「は、はい・・・。サエって言うんです」

サエ？

「多分、亡くなった婚約者の名前です」

何となく、起きない理由が淑には見えていた。

「母さん？」

部屋のドアが開いた。

立っていたのは、息子の章吾だ。長身で、ひ弱そうな体つきをしている。全身が真っ白で、体は、今にも倒れそうなくらい細い。

ヤバいところまできている証拠が、淑の目に映る。

「お客さん？」

「ええ。夢解の方たちよ」

母親がそう言うと、章吾は血相を変えた。

「夢解って、夢に関する相談にのるところ？」

母親が、頷く。

「・・・僕のこと相談してたの？」

「だって母さん、あなたが心配なの！サエさんの名前呼び続けているし、体もそんなに痩せちゃって・・・」

「勝手なことすんなよ！！僕の体は僕が一番分かってるんだ！余計なお世話だっ」

怒鳴り声は、近隣に響き渡る。

「・・・おい、あんた本当に自分の体を分かってるのか？」

「せ、先生！」 確実にキレている淑を、ミウミは必死になだめようとしている。

「僕は医者だぞ?! 当然だ!」

「医者だから? 関係ないね。 . . 断言してやるよ」

母親も、ミウミも、この状況に動揺を隠せないでいた。

「あんだこのままじゃ、夢で死ぬぞ . . .」

## 解放

夢解の奴は、僕が夢で死ぬと言っていた。どういうことだ？あんな若僧に、何が分かるんだ？僕は、夢を見ているだけだ。

幸せな夢を・・・

医者なのに、僕は紗江を救えなかった。自分の不甲斐なさに、生きることを辞めてしまいたいと思った。紗江のいない生活なんて意味がない。

紗江に会いたい。会って話をしたい、あの笑顔を見たい、手を握りたい、抱きしめたい。夢の中なら、彼女に会えるんだ。紗江に。

紗江・・・

「動くなっ」

「誰だ？！」

「お医者様、あんたを救いに参りましたよ」

振り返ったそこに立っていたのは、あの夢解の連中だった。

「死んだ人が夢に現れるってのは、よくあることなんですか？」

「ああ。それ以外にも、大切な人や憧れている人が出てくることはよくある」

勉強家のミウミは、鍵つきのメモ帳に書き込む。

「普通は、夢の続きってのは見られない。極まれにあるが、今回の医者のように毎回見るのは問題だ」

「私は、少し羨ましいですけど・・・」

「あの医者の姿を見ただろ？多分、三度の飯より眠ることを優先しちゃってる。あのままいけば、栄養失調になりかねないし・・・それに」

淑がどんよりとした空を見上げた。

「夢と現実の境目が分からなくなるのも、時間の問題だ」

その身を滅ぼしても、会いたい。その気持ちが淑には理解できなかった。

「ま、救われたくないって思っている奴に手を出すのは困難だがな」  
ミウミは、確かに、と呟き腕を組んだ。

「けど私は、無理にでも救った方がいいと思います」  
「・・・当然だ」

二人は目を合わせ、幸せそうな笑みを浮かべながら眠る章吾の夢へと入って行った。

「こ、ここで何してる!」

章吾の目が、動揺している。

「何って、助けにきたんだよ」

冷静な淑の姿が、章吾の怒りに触れた。

「邪魔しないでくれよ! 何なんだよあんたらっ! 僕のこととは放っておいてくれ!」

「そうしたいのはこっちも一緒だ。けど、家賃がかかってんだ! 手ぶらで帰るわけにはいかねえんだよ!」

「なんか、理由がカツコ悪い・・・」

「とにかくだ、お前をこの夢から解放する」

「やめてくれ! 紗江に会えなくなる!!」

淑の顔つきが明らかに変わった。

「あなたの婚約者は死んだ。医者のかせに、そんなことも分からないのか?」

「先生、言いすぎですよ!」

ミウミが淑の腕を掴んだ。

「言いすぎ? 事実を述べて何が悪い」

「死んだよ・・・確かに死んだ。でも、夢でなら紗江に会えるんだ! だから・・・」

淑が吹き出した。

「夢でなら会える？バカか？あの女は、あんたが抱いた妄想によって生まれた、紗江に似ている女だ」

「何を証拠に・・・」

言葉につまる章吾。彼の目には、笑顔で立つ紗江の姿しか見えていない。

「本当の紗江なら、弱っていくあんたを見て何も言わないわけないだろ？哀しみに浸って、夢にすがりつくあんたに、紗江ならなんて言うか・・・あんた分らないのか？」

・・・紗江なら・・・

しつかりしてよ、章吾！

「紗江は・・・」

「こんな夢に、いつまでいるつもりだ？死ぬまでか？それより医者なら、やるべきことが山ほどあるんじゃないのか？」

章吾は、力が抜けたようにその場にしゃがみこんだ。

そうだ、紗江がいつも言っていた・・・。

『章吾には、人を命を救う力がある。あなたは、私が一番尊敬する人よ』

紗江・・・紗江・・・

章吾は、声を上げて泣いた。

「・・・さ、目を覚ますぞ」

淑の声に、ミウミも頷いた。

淑の手から光が生まれる。

「依頼人を解放せよ」

その光は、優しく三人を包んだ。

「夢解・・・」

夢でもいいから・・・

「紗江さんも、一安心でしょうね」

ミウミが紗江の墓石に手向けた花は、百合だ。

「ああ」淑も手を合わせた。

「章吾さん、仕事にも復帰したみたいですよ。元気になって、本当によかったです」

ミウミの笑顔は、何の屈託もない。彼女の笑顔を見ると、わけもなく安心する。

「先生には、心に決めた人とかいないんですか？」

「いねえよ」

鼻で笑いながら答えた。

「憧れますよね、運命の人とか」

「そうでもない。と言う代わりに、淑は首をかしげた。

「紗江さん、章吾さんはもう大丈夫ですからねえ！見守ってあげてください！」

「墓石に話し掛けるなんて、変わってるな？」

呟いた淑に、ミウミは膨れっ面を向けた。

「紗江さんはちゃんと聞いててくれますよ」

「はいはい・・・」力のない返事を返した。

人は、死んだら終わりだ。幽霊なんて、俺は信じない。一度失ったら、戻ってくることもないんだ。

「お前、死んだ奴で会いたい奴いるか？」

「そうですねえ・・・祖父に会いたいです。たまに、夢にも出てきますよ」

「夢ねえ・・・それも、ミウミが抱く妄想だろう。」

「先生は？」

「いねえよ」

即答した。

夢でもいいから、会いたいと願った。けれども、現れることはなかった。

「思えば俺は、アイツが死んでから夢なんて見なくなった。」

「先生？」

「不覚にも涙が零れそうになったから、慌てて背を向けた。」

「帰るぞ」

「は・・・はい」

そのことに、ミウミは気づいただろうか・・・。

## 独占

『ラジオの前のみなさん、今夜も残すところあと少しです。メイはとっても悲しい！最後に一枚、ラジオネームラストダンスさんからのお便りを読みませう！いつもありがとうございます。』

メイさんのタイプの男性はどんな人ですか？わあ困ったなあ！ええつとお優しくしてメイのワガママを全部受け止めてくれる人かな！なかなかいないんだよねえ！ラストダンスさんは、メイのワガママ聞いてくれるかな？なあんて！恥ずかしい

では、今夜はこの辺で！お相手はメイでした！明日も聞いてくださいなね バイチャー！！』

彼女の声は、天使の声だ。甘くて、柔らかくて、聞いているとつとりしてくる。

外の世界に出ることを辞めた僕にとって、彼女の声は救いだった。癒される。僕が出した葉書を読んでもくれた日は、生きることが楽しくて仕方がない。彼女が僕のラジオネームを読んでもくれる・・・僕の問題に答えてくれる。彼女は、僕に話し掛けてくれるんだ・・・

ラストダンス・・・彼女といつか、満月の下で踊ることが僕の願い。彼女をもっと知りたい。

彼女は僕のものだ。

僕だけのものだ・・・。

今夜も、彼女の夢を見よう。僕が彼女を独占できる、唯一の手段。愛くるしい顔をした彼女と向き合って、沢山話しをするんだ。僕の問いに彼女が答えて、僕のこと知ってもらいたい。夢でなら、それが可能だ。

あの日、突然僕に声を掛けてくれたあの人は、僕が夢で彼女を独占することを可能にしてくれた神だ。彼が僕の願いを叶えてくれる。

「スキな人を独占したい気持ちは、よく分かるよ・・・」

あの人は、そう言ってくれた。

「ねえ、俺が助けてあげるよ。キミの願い、叶えてあげるから」

あの日、僕は手に入れたんだ。たとえ夢の中でも、彼女を手に入れることができたんだ。

彼女を、僕だけの空間に閉じ込めることが・・・。

## 突然の来客

突然の来客に、淑とミウミは固まっていた。

ピンク色の長い髪を高く二つに結び、二重の大きな瞳はなぜかブル。モデル体系の彼女に、淑の目は点になっていた。

「・・・メイさんって、あの・・・ご本名ですか？」

「本名は逢瀬美和あつせ みわって言うの。五月にデビューしたから、芸名をメイにしたの」

メイと言う名は、淑が唯一知っている、ドラマ、ラジオで活躍するアイドルだ。

「あの・・・そんな凄い人が、うちに何か？」ミウミも、緊張を隠せない。

「野辺先生の紹介で来たの。メイ、一ヶ月くらい前からよく眠れなくて・・・」

初めて、淑は野辺がここを紹介してくれたことに感謝した。

「夢にうなされるの・・・」

メイは上品に、出された紅茶を飲む。

「毎晩ですか？」

「うん・・・」

ミウミの目に、メイの不安な表情が映った。

「それは苦しいですね・・・ね、先生？」

返事がない。

「先生？」

口を開けたまま、ちゃっかり色紙を用意している淑。依頼人だということ、完全に忘れてる。

「あの、サイン頂けますか？」

「もお先生！・・・！」

珍しく仕事熱心だと思ったらこれだ！

メイは夢の中で椅子に座っている。目の前に、もう一つ椅子があつてその席は最初、空いているようだ。すると、誰かが来てその空いている席に座る。白いTシャツを着た、太めの男が目映る。

男は座るなり、につこり笑う。そして、質問しだす。家族構成、友達関係、服の趣味、よく行く場所、恋人はいるか・質問はとめどなくて、耳を塞ごうとしたら、いつの間にか両腕が手錠で椅子につながれていて動かせない。

必死に抵抗しても、体は動かない。男の声が頭の中に響き続ける。毎朝、泣きながら目覚めているようだ。

「気持ち悪い夢ですね・」ゾツとしたのが、ミウミも顔色を変える。

「ええ・・けどね、続きがあるの。もつと、怖い・」  
メイは身体を震わせていた。

「その男、メイの握手会に現れたの」  
淑の目つきが、やっと変わった。

「メイ、すっごく恐かったんだけど・・頑張つて笑顔作つたの。それで、握手したときね・・その男言つたの」  
背筋がゾクツとした。

「どうして、僕の質問に答えてくれないの?」  
あの瞬間は、今も鮮明に覚えている。笑つた男は、とても冷たい手をしていた。

「先生、何なんですか? こういうのって・」  
ミウミの問いかけに、淑の回答はなかった。

「淑さん、助けてください!」  
目の前にいる、か細く初々しいメイ。世界中の美女でさえ、彼女のこの表情には勝てないだろう。

「依頼は、どんなものでも受けます。安心してください、メイさん」  
「・・この、いつもと百八十度違う態度の男は、一体誰? 依頼はどんなものでも受けます? いつも渋い顔して、嫌々受けてるくせに!!」

「ありがとう。メイ、すっごい安心したあ！だって、こんなにかっ  
こ良くて、頼もしい方が守ってくれるんだもん！」

頼もしい？眉間にシワを寄せたミウミが淑を見ると、彼の目は完  
全にメイの笑顔の虜になっていた。

## 手錠

メイがデザインしたサングラスが、今日発売される。メイはイベントとして、そのサングラスが置かれたお店の、一日店員をするこ  
とになっていた。

「うわぁ！長蛇の列！」

ミウミが目丸くする。

「先生、サングラス欲しかったんですね？似合いますよ、きっと」  
「んなわけねえだろ。バカ」

淑は目を尖らせ、にこやかに笑うメイを見つめる。

「じゃやっぱり、メイさん目当てなんですかぁ？」

「アホッ。お前、事務所帰るか？」

淑がここにいる意図が、ミウミには全く分からなかった。

「凄い人気だなぁ・・・メイさんって」

男女問わず人気があるメイ。彼女の柔らかい笑顔と優しい声が、  
人を引きつけるのだろう。

「・・・鳴った」

「へ？」点になったミウミの目に、走り出す淑が映る。

「ちよ、先生?!」

人混みを掻き分け、後を追う。風のように速い淑を見逃すまいと、  
ミウミは必死だった。

「先生？」

やっと立ち止まったとき、二人の視線の先にいたのは太った男だ。  
「夢に出てきた男が現れたら、ワン切りしてもらおうよう依頼人に頼  
んであったんだ」

「なるほど・・・で、あの人に会うんですか？」

「今行つても逃げられるか、逆上するかどっちかだろう・・・しばらく  
様子をみる」

メイの存在に浮かれて、仕事なんてそっちのけだと思いきや、ち

やんと淑は動いている。  
やっぱり、彼は凄い。

「あの人、何なんでしよう?」

「過剰なファン。見てりゃ分かる・他のファンと違って、あの目つきはかなりヤバい」

虚ろな目で、メイを食い入るように見る男。確かに、尋常ではなさそうだ。

「先生、何で分かるんですか?」

「似ているような目をした奴に、会ったことがある」

・・あの目は、貪欲さに満ちた目だ。

自らの欲望のためだけに動いている証拠。

「分かってないと思うから言っとくが、今回は奴の夢に入るから」

「え?」そんな展開、考えていなかったと言わんばかりに、ミウミは目をギョツとさせた。

「分かりませんよ!何であの人の?メイさんじゃないんですか?」

「依頼人は、あの男の夢に縛られてるんだ」

その一言は、ミウミの頭に「?」マークを増やした。

「前に、二つの夢が交差していた依頼があつたら?」

「和美ちゃん!」

淑が頷く。

「強い思いによって、ああいうことが起きた。今回もそれと似ている。男の過剰な思いが、メイの夢と男の夢を交差させてんだ。けど、違うところが一つ」

サングラスが入った袋を大事そうに抱えながら、男は漫画喫茶へと入って行った。

「違うところって?」

「夢の中で、依頼人を縛ってやがる。しかも、意識があつてやってる」

「・・・よく分かりません・・・」口をへの字にしたミウミが言う。

「夢の中で自分の意識があることは、よくある。コレは夢なんだと、奴は自覚してんだ」

「じゃ、分かかっててメイさんを縛ってるんですか？」

ああ。と淑は小さく頷いた。

「多分、手錠で依頼人をつないでるんだらうな・・・」

・・・手錠？

「手錠って、何で分かるんですか？」

「・・・ちよつとな・・・」

気になる返答だった。

「ああ・・・芸能人つてのにつられて依頼を受けたが、大失敗だなあ」

淑はため息混じりにそう言った。

「先生？」

ミウミにはそれが、理解できなかった・・・。

「覚悟しとけミウミ。厄介なことになりそうだな・・・」

冷たい風が、二人の間を吹きぬけていった。

## 展開

今夜も夢を見よう。彼女を独占できる瞬間だ。

「メイちゃん・・・」

名前を呼ばれたメイは、重たい目蓋をゆっくりと開けた。  
そこは、いつもの夢の中だ。

「あ、あんた誰なのよ！メイに恨みでもあるの？」  
彼女は必死に叫ぶ。

恨み？・・・そんなんじゃない！

「僕は、キミをもつと知りたいんだ！僕のことも知ってもらいたい  
！ねえ、お話しよう！」

「いやよ！外してよ、この手錠！！」

「それは・・・できない・・・」

だって外しちゃったら・・・

「夢でメイに会えなくなるんだよな？」

男の背後から、淑とミウミが現れた。

「淑さん、ミウミさん！」

部外者の登場に、男は明らかに混乱していた。

「だ、誰だ？！」

「勝手に部屋に入らせてもらったよ。田崎<sup>たき</sup>」

管理人を騙して、二人は男、田崎の部屋に侵入。寝入る彼の夢に  
入ったのだ。

「あの人たちは、夢解の人よ！メイを助けにきたんだから！」

「夢解・・・」

田崎の息が荒くなる。

「なあ・・・その手錠、お前、誰から貰ったんだ？」

淑の殺気が、田崎を襲う。ミウミも、今までにないくらい淑がキ  
していることを察知していた。

「これは・・・」

「俺があげたんだよぉ」

誰?!

全員が、声が出た方を見た。

白銀の長い髪、着ている服はタキシード。にっこりと微笑みなが  
ら、一人の男が暗闇から現れた。

「久しぶりだねえ」淑・・・会えて嬉しいよぉ」

「やっぱりお前か・・・烏かしす」

この展開に、ミウミは目を丸くした。

## 嵐の予感・・・

「いいねえ〜淑う！今も昔も、その冷たい目は健在だあ！！」

気持ちの悪い、引きつった笑い声に、鳥肌が立った。

「田崎くん、メイさん・・・キミたちはもう用済みだからあ・・・消えてくださいねえ」

そう言った鳥が手を二回叩くと、田崎とメイは一瞬にして消えた。

「せ、先生?!」

残されたのは、手錠だけ。

「俺の手錠お〜！」鳥は手錠を拾い、軽くキスした。

「今頃、二人とも記憶のないまま目覚めてるな」

「記憶がないって?!」

困惑したミウミは、無意識に声を荒げる。

「メイと田崎の中にある、俺らに関する記憶は鳥によって抹消された」

見開いた目のまま、ミウミはそんなことをしでかした鳥を見つめた。

「可愛い子だねえ淑う・・・彼女、名前はなんて言うのぉ?」

鳥の笑みに、ミウミは思わず淑の後ろに隠れた。

「で、鳥。今回の目的は、俺に会うためか?」

「大当たりい！丁度使えそうな駒を見つけたんでねえ〜利用しちゃうたわけえ」

いつも一人で、憧れる人を見つめる男。手が届かないとわかってるのに、食い入るように見ていた姿を見て、こいつは使えそうだと思った。だから声をかけた・・・。

淑に会うために・・・。

「やれやれ、モテる男は辛いよ」淑が鼻で笑う。

「分かってくれるう?俺ってば、キミを殺したいほど愛しちゃってるのぉ!」

なんて、不気味な目をする人だろう。

「そいつは困るなあ。殺される前に、殺しとくか・・・」

「クハハア！！キミに俺を殺すことはできないよあ・・・だって、俺の方が強いしい」

烏は舌を出し、口を回りをなめる。

「どうだろうな？試してみるか？」

「今夜はやめとくよあ・・・それに、俺は戦いに来たんじゃなくて、警告しに来ただけだからあ」

「警告？」 淑は眉をひそめた。

「そお！機は熟した・・・俺らは行動を開始するう。死にたくなかつたら、夢職を辞めることだよあ」

行動を開始？

「わざわざソレを宣言するってことは、自分たちが勝つとも思ってるのか？」

「当然！無力なお前らはあ・・・指でもしやぶって見ていてよあ」

烏が、ミウミに目をやった。

「こつちに来るかい？可愛い子は大歓迎だよあ」

目を逸らし、淑の腕を強く掴んだ。

正直、この場に立っていることさえ恐い。

「じゃあそろそろおいとましようっ」

舞台役者のように、烏は深々とお辞儀をした。

「警告はしたからねえ淑う」

「次会う日まで殺さないで置いてやること、感謝しろよ。烏」

淑の言葉に、背筋が凍りつくような笑みを残し、烏はその場から消えていった。

夢の中で殺しができるとしたら、この世には完全犯罪が多発する。他人の夢に入ることが出来る夢職には、それが可能だ。

殺し目的でこの力を使う奴らが現れたら。またそれが、組織化さ

れたら・・・太刀打ちできるのは同じ力を持つ、夢職のみ。警察だつて入り込めないんだ・・・。

あり得ない戦いが始まるのに、そう時間はかかりそうにない。

もしかしたら、嵐は目の前までやってきているのかもしれない。

## ドラゴン

あの一件以来、淑は何も語らない。

テレビに映るメイも、何もなかったかのように笑顔を振りまいている。記憶を消されたんだから当たり前だが、ミウミの中に違和感が残っている。

田崎はどうなのだろう……。メイと同じく、何もなかったかのようになまた過剰なファンをやっているのだろうか。凄い出来事だったはずなのに、当事者たちは平然としている。メイも、田崎も、淑も、ミウミただ一人、納得できない日々が続いていた。

「先生、何か言うことないんですか？」

漫画に没頭する淑に話し掛けても、よく分からない返答しか返ってこない。

触れてほしくないのだろう。曖昧さから、それが伝わってくる。

「先生ってば！私に何か言うことないんですか?!」

「ない。何か言ってほしいのか？」

「・・・な、何って・・・鳥とかいう人のこととか・・・」

知ってどうすんだ？淑の目はそう言っている。

「私だって、先生のパートナーやってるんですよ！教えてくれたっていいじゃないですか！」

「・・・お前には全く関係のないことだ。むしろ、入ってこられても困る」

カチンツときた。けれど、すぐに虚しさに襲われた。無力だと、一刀両断された気分になったから。

「・・・どーせ使えないパートナーですよ！」

「そんなこと言っていないだろ？」

「言ってますよ！っていうか、顔見てたら伝わってきますよ！」

ミウミの勝手な解釈に、淑は呆れた顔だった。

顔見てたら伝わってくる？憶測でものを言われても、どうしたらいいのか分からない。

「勝手にしろ・・・疲れる」

淑は漫画に目を戻した。

「すいませんね・・・疲れるパートナーで!!」

ミウミは怒りで事務所のドアを閉め、出て行ってしまった。

「短気な女・・・苦手」

静まり返った事務所に、淑の行き場のない呟きがのこされた。

先生にとって、私の存在は何なのだろう。ただの事務所掃除か？ファックスの整理屋？お茶くみ？！

夢職のパートナーとして、認めてくれはしないのだろうか・・・頼りたいとは、役に立っているとは、思ってくれないのだろうか。

「くれるわけないかあ・・・」

独り言を口にして、寂しさを隠すために小石を蹴った。あの石は、使えない自分だ・・・。

夢に入る力を持つてはいるが、自分には、淑にあるような力と強さはない。誰かを夢から解放できる力量は、まだ備わっていない。だから、淑の元に行った。腕利きと言われた淑の側で、少しでも強くなりたいと思ったから。

けれども現実は何回、淑の強さを目の当たりにして、それに圧倒されているだけだ。何もできず、ただ見ているだけ。木偶の坊と変わらない。

使えない。無力。役立たず。・・・冷たい言葉が、頭の中でこだました。

「バーカッ！」

バカ？！

思わず、勢いよく振り返った。

自分のことかと思ったんだ・・・。

「バカじゃないもん！」

けど違った。その言葉は、ミウミに向けられたものではなかった。「バカだよ！毎晩ドラゴンと戦ってるなんて、お前、頭いかれてんじゃないのー！」

見れば、川原の方で小学生達がもめている。

「本当に戦ってたんだよ！嘘じゃない！」

四人に囲まれながらも、一人の少年は必死で言い返していた。

「ウソツキ空知！」

「違う！」

否定している少年が、自分と被った。

「もお行こうぜ。こんな奴、ほっとこ！」

一人取り残され、やり場のない思いを抱えた少年が、痛々しかった。そして、同じような境遇にいる自分が、哀れだった。

「大丈夫？」

ミウミの声に驚いたのか、少年は肩をすくめた。

「うん・・・」慌てて涙を拭う少年。

「さっきの・・・友達？」

「・・・クラスの奴。オレンこと、バカにすんだ」

ふーん。と、何て言ったらいいのか分からないミウミは、曖昧に何度か頷いた。

「お姉ちゃん、さっきの聞いてた？」

「うん・・・ドラゴンがどうとかって・・・」

「オレ、いかれてるって思う？」

少年の真つ青な瞳に、ミウミが映る。

「ううん！思わないよー！」

ミウミは、大袈裟なくらい首を振った。

「だって、私だって小さい頃ペガサスに会ったもん！」

少年の目が、ミウミを軽蔑する。

「それは、嘘でしょ？」

「わあ！ホラ！ウソツキ呼ばわりするう！本当に本当なんだから」

顔を真っ赤にさせたミウミを見て、少年が初めて笑った。

「変な奴・・・けど、笑ってごめん」

「別にいいわよ。散々笑われたから・・・」

「・・・オレも・・・」

二人の空気が、シユンとしぼんだ。

「あ、私、ミウミって言うの。君は？」

「オレ、村雨空知」

空気が、少しだけ明るさを取り戻した。

「ねえ、空知くん。よかったら、そのドラゴンの話し・・・聞かせてくれない？」

## リアル

東京タワーよりでかいドラゴンが、オレ目がけて飛んで来るんだよ。俺は何も持ってないから、最初は逃げているだけなんだけど、段々倒せるんじゃないかなって思えてきてさ。オレ、格闘ゲームとかRPG好きだから！タイミングを見計らって、オレはドラゴンに飛び乗るんだ。不思議なくらい、体が軽いんだぜ？

そして、ドラゴンに無事乗ったら、ドラゴンの頭とか体とか、叩きまくるの！どんなけ叩いてもオレは全く痛くないけど、ドラゴンは叩くごとに悲鳴を上げるの。

凄いだろ？オレ、毎晩そいつと戦ってたよ！

ねえミウミ、夢職なんでしょ？一緒にドラゴンを倒しに行こう！

空知の表情に、嫌とは言えなかった。夢職と嘘をついたのは、見栄を張った。

なけなしの、見栄・・・今となっては後悔している。

けれども、後には引けない。ミウミの家に行き、そこで彼の夢に入ることを決心した。淑がいなくても、ずっと一緒に色んな夢に入ってきたんだ。力は、きつとついているはず。

一人でも、大丈夫。

「ミウミ？」

我に返った。

「え？」

「大丈夫？」

一瞬、自分がどこで何をしようとしているのか忘れていた。けど、決心したことはすぐに頭の中に戻ってきた。

「大丈夫。ね、空知くん、今眠い？」

「ん・・・ちよっとだけ。横になってもいい？」

「もちろん」

フワフワのクッションを貸し、空知はそれを枕に横になった。ちよつとだけと言っていたものの、学校帰りで疲れたのだろう、数分で寝入ってしまった。

「大丈夫・・・先生のようにすれば・・・」  
手に汗を握りながら、ミウミは空知の夢に入ってしまった。

茨・・・一面、鋭い刺に包まれた世界。四方八方、茨が敷き詰められている。

夢の中では痛みは感じないが、見ているだけで痛い錯覚に陥りそうになる。

「空知くん？」

辺りを見回すが、空知がいない。

「空知くん?!」

ミウミは、茨の中を走り出した。

どこ?彼の夢の中なのに、本人がいないなんて・・・

「ミウミイ!」

声が出た。安堵と同時に、不安も過ぎった。

「空知くん？」

彼の姿を発見したのはいいが、目の前の光景にミウミは絶句した。空知の言った通り、そこにいたのはドラゴンだ。東京タワーより遙かに大きい・・・

「空知くん・・・本当に、コレに乗ったの？」

「うん。ミウミもきつと乗れるぜ、オレに任せて」

空知は生き生きとしている。その姿は、何か自信に満ちた姿だ。けれどもミウミは、まだ不安に狩られていた。

何か・・・違う。

「ミウミ?」

ドラゴンなんて、ファンタジーの本や映画でしか見たことないから、

本物がどういったものなのかは知らない。だけど、ここにいるドラゴンのむき出しになった黄色い目や、ごわごわしている皮膚、羽の色、そして奇声は、まるで本や映画からそのまま飛び出してきたものようだ。

「リアルなんだ。そうだ、この夢はリアルすぎるんだ。」

普通は、どことなくモヤがかかっている、何が何だかよくわからない夢の世界が多い。が、はっきりと分かる茨の世界は、痛くないと分かっているても痛みを感じるくらいリアルだし、ドラゴンなんていないと分かっているても、あれを見たら恐怖におののくだろう。

何で、こんなにも・・・

「ミウミ、何してんだよ！一緒に倒しに行こう！」

すると突然、ミウミと空知の間を引き裂くように、何かが飛んできた。

「キヤア！」ミウミは尻餅をつく。

飛び去ったのは、小さなドラゴン。まだいたのかと、ミウミは目を疑った。

「空知くん、大丈夫？」

「平気だよ。あんなちっこいドラゴンがいたなんて」

空知は、キョトンとした目でミウミを見た。

「ミウミ、どうしたの？」

凍りついたようなミウミの顔、震える体。

「そ・・・空知くん・・・う、腕・・・」

「え？」

自分の腕に目をやる空知。血の気が引いた。

右腕が、ない・・・。

「・・・わあああああ！」

叫ぶ空知。

あの小さいドラゴンが、空知の右腕をくわえている。

落ち着け、これは夢なんだ。ミウミは自分に言い聞かせ、空知を落ち着かせようとするが、体が動かない。あまりにもリアルな場面

に、腰が抜けている。

「そ、空知くん・・・」

空知が気を失った。

まずい。夢の中で気を失うと、目覚められなくなる。淑が言っていた。

淑・・・淑・・・

「せ、先生！！先生！！」

泣き叫んでいた。何度も、何度もその名を呼んだ。

助けてほしくて・・・

「呼んだか、ミウミ」

聞こえてきた声に、現れた姿に、ミウミの目から大粒の涙がとめどなく流れ出した。

## ミウミの失敗

「随分変わった夢だなあ・・・」

平然とした顔つきで現れた淑は、淡々とした口調で話す。

「夢見る少年つてのは、時に臨場感溢れる夢を見るもんだ」

淑の目に、気絶した空知が入る。

「安心しろミウミ。これは、俺と入った夢と何ら変わりない。ただ・テレビゲームのしすぎつても命取りになるんだな、夢がこんなにリアルじゃ気絶すんのも無理ない」

淑にそう言われて、ミウミは心から安心した。

「たまにはいい上司を演じようかと、お前の家に様子を見に行ったらこれだ・・・全く、面倒な部下だよ」

会わせる顔がない。

「答えるミウミ。お前、この夢に入ってどうしようと思ってたんだ？」

淑の静かな怒りが、ヒシヒシと伝わってくる。

「その・・・ち、力になれるかって・・・思ってた・・・」俯いたまま、声を震わす。

「なるほどな。で、力になった結果がこれか？お前、夢の中で気を失うことがどれほど危険か、忘れたのか？」

「お、覚えてます」

気を失うと、下手をすれば一生目覚めることができなくなる可能性がある。

「半端な力で他人の夢に入ればどうなるか、忘れたのか？」

言葉がでない。

「俺たち夢職は、夢に入ったら冷静さを保つ。己が夢に惑わされた状態でいたら、誤って人を殺すことになるんだよ」

「・・・はい・・・」

涙が止まらない。

「自分は無力じゃないと、証明したかったのか？」  
痛いところを突かれた。

「私は・・・」

「もし、そのために他人の夢に入ったとしたら、お前は無力以下。  
最低だ」

本音は・・・本心は・・・そのためだ。だから、言い返せなかった。  
「ミウミ」

「・・・はい・・・」弱々しい声。

「今回のこと、深く反省しろ」  
深く頷いた。

「二人を、夢から解放するっ」  
淑の力強い光が、辺りを包む。

「夢解・・・」

## 淑の過去

いくら記憶が薄れてもいっても、劣化しないものがある。深い後悔と、重い罪の意識に駆られ、それはまるで昨日のことのように覚えていて。背負った十字架は、まだ下ろせそうにない。

全てが夢であつたら、どんなによかつただろう。目覚めたら何もかも元通り、変わらない時が回りだす。そうだつたら、どんなによかつただろう。

「何だこれ？」

机の前に出された紙切れに、淑は顔をしかめた。

「辞表です」

ミウミが、真つすぐに答える。

「今回のこと、凄く反省しました。自分の未熟さに、嫌ってほど気づかされたんです」

心臓の鼓動が、激しく動く。

「私は、夢職にも向いてなければ、先生のパートナーにも向いてません。よく分かりました・・野辺教授のところに戻ります」

心がこんなに締め付けられるのは、行きたくないと言っているもう一人の自分なのかもしれない。

できることなら、この素晴らしい夢職と、ずっといたかった。

「・・俺な、夢職になる前・・他人の夢に入つては、悪さばかりしてたんだ」

「・・へ？」

淑の過去。聞くのは、初めてだった。

「面白い力に魅せられて、手当たりしだい他人の夢に入って、その夢をぐちゃぐちゃにした。・・前に会つた、鳥と一緒にな」

ミウミは、声が出なかった。

「夢の中で暴れるとな、そいつの生活変わるわけ。ム力つく担任の夢に忍び込んで、メチャメチャ暴れたらさ、そいつ次の日から精神病院入っちゃうた」

信じられなかった。夢に関してエキスパートの淑が、そんな過去を持つてるなんて。

「面白かったんだけどな・俺は段々、違和感感じてた。これでいいのかって、自問自答してた・そんな矢先、俺は夢解の連中に捕まった。この力を悪用する可能性があるとして」

想像できない。

この冷静沈着、頭脳明晰な淑が・

「烏も一緒に捕まったんだ。けど、俺だけはそのクソ教授に救われた」

野辺教授・

「クソ教授は俺に、夢解に入って夢職として働けって言ってきたよ。最初は、ツバ吐いてやったけど、あんまり真剣な顔して何度も言うてくるから・徐々にあいつの目を見るようになった」

あんなに真剣に、自分と向き合ってくれる人に初めて会ったんだ。いつも独りで、ここにいるのに誰も気づいてくれない。俺は、そんな存在でしかなかったから・

「淑、人生はやり直しがきくんだよ」

だから、俺の名を呼び、そう言うてくれた野辺に・ついて行くことにしたんだ。

「あの・・烏は・」

ミウミが恐る恐る尋ねる。

「あいつは、夢解を脱獄した。そして、クソ教授に寝返った俺を、今でも恨んでんだよ」

淑が、どこか遠くを見つめている。その目はどこか淋しそうで、まるで涙を堪える子どものようだった。

「ミウミ、お前にも同じことを言おう」

淑は咳払いした。

「人生はやり直しがきくみたいだ・・・だから、やり直す気があんなら、ここでやり直せ」

淑の顔が赤く見えたのは、気のせいだろうか。

「先生、私、ここにいていいんですか？」

「・・・俺は反省しろって言ったんだ。辞めるとは言っていない」

ミウミはそれこそ子どものように、大泣きした。

「第一、お前がいなきゃこの事務所がゴミ屋敷になる」

掃除係でもいい、ここにいたい。もつと一緒に、色んな経験を積みみたい。

いつか、立派な夢職になるために。

「あ、ありがとうございます！！」

「分かったから泣き止め！うるせーんだよ！」

「先生、私、一杯一杯、頑張ります！！」

素直に泣ける、こいつが羨ましい。素直に笑える、こいつが羨ましい。初めて会った時、その真つすぐな瞳に俺は、自分にならないものを感じた。

ミウミ、お前は大丈夫だよ。いつか立派な夢職になれる。お前は、俺とは違う。愚かな俺とは違うから・・・。

いつか、全てを話せる時がきたら、何もかも、お前の前でさらけ出していいか？そしたらお前は、俺のこゝろを受け止めてくれるか？

揺らぐことのない真つすぐな瞳で、俺を見てくれるか・・・？

淑の過去（後書き）

・・・じゅじゅって終わらせよう

夢解

## エピソード

ここは、とある街にある古びたビルの地下。

ここに住むのは、光を嫌い、闇を好む連中だ。

「あららあ、また死んじゃったあ」

動かなくなつた大男。それを見てニヤつくのは、烏だ。

「けど凄いやねえ！大の男が夢ごときで死んじゃうんだぜえ？凄くないい？」

烏が話し掛けるのは、彼の肩に乗っている黒猫。

「沢山実験しないとさあゝいざつて時に失敗しちゃったら恥ずかしいでしょお？特に、淑の前なんかでさあ？」

黒猫は烏の不気味さを感じとつたのか、彼の肩を降りて闇の中に身を潜める。

「あれれえ？恐がっちゃったあ？シヨックウ」

「お前が不気味過ぎるからだよ」

突然、闇の中から男が現れた。

「会いたかつたよあゝ楼お元気してた？」

楼と呼ばれた男は、針のように鋭い目の持ち主。

「まあな。それより用件は何だ？俺を呼び出せるなんて、お前くらいだぞ」

「まあまあそう慌てないでえ・・・まだ来るからさあ」

烏がそう言うと、楼の後ろからさらに二人現れた。

「何ね、こんな夜中に呼び出しよって」

青い目をした少年が、面倒くさそうな声を出す。

「やあ聡明久しぶり」

にこやかな烏を見た聡明は、思わずため息を漏らした。

このマイペース野郎・・・

「リリーも来てくれてありがとう」

「どういたしまして」「ロリータファッションのリリーという少女が、丁寧に頭を下げた。

「さてとあゝ集まったところで話しを始めましょうかあ」  
鳥が立ち上がった。

夢解・・・それは、鳥が最も憎む組織である。奴らは彼の一番欲しいものを問答無用で奪い、彼のことを抹殺しようとした。

『鳥は危険だ・・・』

連中は彼をそう判断し、牢獄に閉じ込めた。彼の声も、言葉も、訴えも聞かずに・・・。

そして、彼が一番欲しかったものを奪い去っていった。

憎い・・・憎いんだ・・・

こんな組織は、潰すに限る。

もし、完全に潰すことができたら・・・きっとキミは戻ってくるだろう。くだらない希望なんて捨てて、この闇の世界に。

それだけを楽しみに、これから動き出すからね。

待っていてね淑・・・

キミは俺のものだから。

一部完

## エピローグ（後書き）

とりあえず・・・一部完って形にして終わります。

まだ何も終わってないんだけど・・・（泣）

また色々考えて、新しく始めたいと思います。

これまで読んでくださった方々、こんな話しに目を通してくださり  
本当にありがとうございます。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2026b/>

---

夢解

2008年11月7日07時15分発行